サビエル生誕五百年
巡礼の道
613

藤屋佩士
(下松市幸ケ丘)

こころの深呼吸

～傘寿を前に①～

この巡礼記を毎週1回書き始めたのは2006年のこと。もう13年間も書き続けることが出来たのは、人様の評価は別として、小さい頃から自分は根気がないと思っていただけに自分自身の驚きである。振り返ると色んな出来事があった。そして「傘寿（さんじゅ）」の前年79歳を迎えた。高齢化社会となり、「還暦」に始まり「白寿」に至る一連の呼び方は今の現実とは異なる。その最も分かりやすい例は「古希」。杜甫の詩から言われるようになった「人生七十古来稀なり」は、今の世の中にはマッチせず、当たり前の事になった。

しかし、これらの言い方を始め先人が培った文化は、現在と多少のそごがあっても意義深いものを感じる。例えば、正月に食べた数の子、鯛、昆布、豆などそれぞれに意味がある。正月以外に余り着ることがなくなった和服も、日本の伝統文化が感じられる。自分にも昔の人の変わらぬ心があるからだろう。

正月に妻が買い求めていた片柳神父（現・宇部教会）の「こころの深呼吸」を読む。目を閉じ体の深呼吸をする。

体の深呼吸と心の深呼吸の違いは何だろう。「こころの深呼吸」が生きる意味を深めてくれているような気がする。

以前は、クリスマス、正月によく我が家を訪れてくれたイエズス会の外人神父。今年は誰も来られなかった。来る神父がもういないのだ。最近まで親しくしていたスペイン人のバラ神父（写真）は東京にあるイエズス会の老人ホームに異動となり、会からの連絡で年末に亡くなられたと知る。イエズス会を創立したイグナチオ・ロヨラの「霊操」。神との交わりの体験に導くための書物を日本語に訳した神父。読んでいくと「霊操」とは心の体操のような気がする。

半世紀以上日本に住み、日本の土となられたのだ。下松教会におられた時「私の死んだ時に飾る写真を撮ってほしい」と言われ、数枚撮った。東京で行われた葬儀でそれが使用されたかどうかは知らない。「傘寿」を越えて日本に生きた神父の生き方を、目を閉じ、大きな深呼吸とともに思い浮かべると、身の引き締まる思いがする。

どんな生き方をしようが、人は誰も必ず死ぬ。バラ神父はロヨラが残した「人間が造られたのは、主なる神を賛美し、敬い、仕えるためであり、こうすることによって自分の霊魂を救うためである」という言葉を信じ生きられたのだ。勿論バラ神父だけでなく、全てのイエズス会の神父、修道者を始め、神の存在を信じる人の生き方であろう。

部屋の世界地図のスペインが目に入る。随分遠くから両親、家族と別れ、日本に来られたのだと改めて思う。その原動力は「神」以外にない。何と凄い生き方だと思えてくる。それに比し、自分の生き方が何とも貧しく思える。いや、そんなことはない。「こころの深呼吸」にあった言葉「人間の最大の不幸は、自分が幸せだと気づかないことです」。言われてみれば確かにその通りだ。傘寿を迎えるために、1日1日を喜びと感謝のうちに生きようと改めて思う。生き方の中で大切なのは心の生き方だと気付かせてくれるのが心の深呼吸ではあるまいか。

再び歩き出す力を与えてくれる

心も体も全てを神にささげた神父